

書写のイメージを変えよう②

山梨大学教授

宮澤 美恵子

正明 まさあき

行書の学習を始めるその前に

中学校書写では「文字を正しく整えて読みやすく速く書く」ことを目指します。そのために速書き書体としての行書を中核にすえた学習指導が行われます。

とはいつももの、小学校六年間を通して楷書だけを学習してきた生徒にとって、「さあ、これから速書きの行書を学習します」といきなり行書学習を始められてはあまりにも唐突すぎるとまよつことになります。当然学習効果を期待することもできないでしょう。

ではどのようにすればよいのでしょうか。
中学生の多くは「中学校書写も小学校書写の内容の繰り返し」と考えているようです。したがって、中学校書写を指導するにあたっては、生徒の書写学習に対する先入観や意識を切り替えるために、中学校書写の目的を理解させ、小学校書写との違いを鮮明にしておくことです。さらに、行書の学習を始めるにあたっては、生徒の行書学習への動機づけが必要になります。

速書きは楷書ではなくなぜ行書なのか

中学生は、楷書とが行書とがの書体意識が薄いので、速書きとしての行書を学習しようといわれてもピンときません。しかし、彼らはすでに速書きを幾度となく経験し、その中で書きやすさを優先した、「いわゆる許容される書き方」や口頭流ではあるけれども「行書らしい書き方」にまつて対応してきているのです。これらの経験や工夫を認めることも行書学習の動機づけになるでしょう。

筆者が中学一年生に実践した方法を紹介します。

明朝体活字で示した文章（百五十文字程度）をクラス全員に配り、字形が少々乱れても構わない、視写によってどれだけ速く書くことができるかが目的であることを指示する（白紙に硬筆で）。黒板にチョークで同じように作業をする（二三人を指名した後を開始）。書き終えた者は挙手をし、所要時間を記入する。書き終えた文字の点画の書き方や字形を隣同士で点検し合う。次に黒板に書かれた文字によって全員で点検し合う。

点検部分を抽出し、次のことを確認し合う。

次に、その方法を考えてみましょう。

自己の体験から、速書きの必要性を考える

中学生になると各教科の学習内容が増えるのに伴って授業における先生の解説や板書をはじめ、自己の考えを記述する量が小学校に比べて急増し、いやがうえにも速書きの必要が生じます。また、総合的な学習の時間や委員会の会議など、人の意見や会話をメモする場面においても速書きが要求されます。

そこで、中学校生活における文字を書く場面を想起し、それらの際に書かれた文字の状態（字形や配列・配置などの適切性）や対応・工夫などを語り合います。小学校のときのように、ていねいにゆっくり書いていては間に合わなくなることを生徒自身が切実な問題として受け止めていることでしょうか。速書きの必要性やそれに対応できる書写力習得への強い願望が生徒一人一人から浮き彫りにされることでしょう。

・点画の形、終筆などが小学校で学習した書き方と異なっている部分がある（いわゆる許容の書き方の出現）。

・点画が連続したり、点画が省かれたりしている部分がある。「折れ」に丸みが出て字形に流動性が出ている（行書の特徴の出現）。

許容される書き方や行書的書き方がすでに出現していることを確認した上で、さらに正確で精度を高めるために許容される書き方や行書学習の必要があることを説く。

ここでのポイントは、いきなり行書ではなく楷書の許容の書き方を入れている点です。行書の学習には、前段階として許容の書き方があることを忘れてはなりません（許容の書き方）については次回詳しく述べます）。

さて、生徒は時間を競って速く書きます。点検では、汚い、読めないなど言い合いますが、点画や字形の変化に対しては的確に指摘します。そして、自分たちが書いている速書き文字は決してためではないことを認められたことに安堵し、授業後の感想では、行書への興味・関心、学習意欲をのぞかせていました。